

「大島郡本控」（宰判本控）4

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

⑤

子

ねずみ

祈祷によるネズミ退治（江戸末期）

ネズミは愛らしい姿をした動物です。

しかし、危険な病原菌を媒介して伝染病を流行させたり、作物・食物に甚大な被害を与えるなど、歴史的にみれば、つねに人間との間に緊張関係をもった動物でした。

江戸時代も終わり頃の嘉永4年（1851）4月、萩藩領大島宰判森村（現周防大島町）の庄屋が、藩に歎願書を提出しました。管轄する離島・浮島で大量のネズミが発生し、たいへんな被害が出ているのです（「大島郡本控」）。

歎願書には次のように記されています。

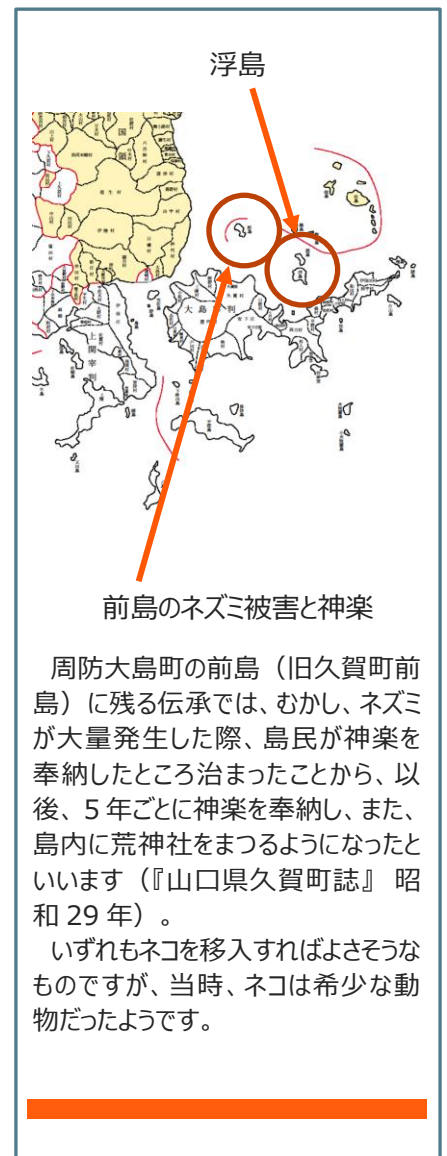
- ①春からネズミが大量発生し、次第に苗代を荒らしたり、唐芋や麦などの作物に被害を与えるようになっている。
- ②島民は、氏神である宝王神社でネズミ退治の祈祷を行ったが効果がない。その後、自力で祈祷を行ったりしたがまるで効果がない。

- ③過去、文政10年（1827）にネズミが大量発生し被害が出た時には、藩から銀子を下げ渡され、それによって祈祷を行ったところ、ネズミを退治することができた。
- ④今回もなにとぞ藩から援助を受けて祈祷を行いたい。

歎願書では、大量発生したネズミのことを「海鼠」と表現しています。また、浮島でのネズミの大量発生は今回が初めてではなく、24年前にも発生していました。

江戸時代には、ネズミの大量発生という事態に対し、神社への祈祷という方法しか有効な手段がなかったこと、島民たちの要望で藩がその費用を支給するケースがあったことがわかります。

一方で、町場では「白いネズミ」を吉祥として尊び、福神である大黒天の使いとする風もあったようです（「和漢三才図絵」）。



前島のネズミ被害と神楽

周防大島町の前島（旧久賀町前島）に残る伝承では、むかし、ネズミが大量発生した際、島民が神楽を奉納したところ治まったことから、以後、5年ごとに神楽を奉納し、また、島内に荒神社をまつようになったといわれています（『山口県久賀町誌』昭和29年）。

いずれもネコを移入すればよさそうなものですが、当時、ネコは希少な動物だったようです。

地域での組織的なネズミ駆除（昭和 40 年代）

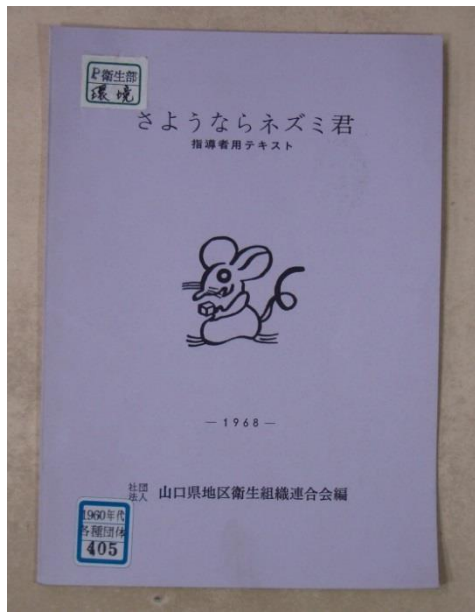
写真は、昭和 43 年（1968）、社団法人山口県地区衛生組織連合会が編集したネズミ駆除のガイドブック「さようならネズミ君」です（行政資料 1960 年代各種団体 405）。県内各地区に組織された衛生組織の指導者用テキストとして配布されました。

ネズミ駆除に熱心に取り組んだ地域は「ねずみ駆除優良地区」として県衛生連合会長から表彰を受けました。

このガイドブックでは、ネズミ駆除には地域での組織的な活動が重要であることを強調するとともに、駆除の方法として、

- (1) 環境的駆除
（ネズミの住みにくい環境づくり）
- (2) 機械的駆除法
（捕そ器によるネズミ捕獲）
- (3) 薬剤による駆除法
（殺そ剤による駆除）

を紹介しています。



社団法人山口県地区衛生組織連合会

社団法人山口県地区衛生組織連合会は、市町村などにおける地区衛生組織の結成を援助し、その活動振興を図ることを目的に、昭和 41 年に設立された団体です。①地区衛生組織の強化、②機関誌の発行、③衛生害虫駆除運動の推進、④県環境衛生推進大会の開催、⑤健康感謝募金の実施、などを主な事業としていました。

